学籍番号: BM212015
氏　　名: 張 婷

ロココ時代における生産者と消費者という両面的な役割を果した女性たち

-女性の社会と経済における役割を分析する-

Women Who Played Both Roles of Producers and Consumers in the Rococo Era :

The Analysis of Women's Role in Society and Economy

一橋大学法学研究科副専攻「EU研究共同プログラム」
ワークショップレポート

要旨

「窓と窓の間の鏡、リヨン製クッション、網目になった白絹のカーテン、空色の絹地で作られたベッド、淡青色ペティコート、灰色の絹靴下、バラ色の絹地衣裳などから、また白鳥の羽毛のついたお色気のある化粧着、あるいはダチョウの羽毛やブラバントのレース」（Sombart,1922; 金森訳, 2000, p199）。女の勝利が光り輝いているロココ時代に形成されたこのような感性化、繊細化の傾向を持つ独特の芸術スタイルは、今も現代の芸術や審美に大きな影響を与えている。

しかし、ルソー、モンテスキューなど、当時の無数の哲学者の作品には女性蔑視的な発言をちらほら見かける。女性が夫に従属し、自立を奪われるべきだと考えられている家父長制社会の中で、女性の地位は非常に低かったと言える。このような社会で、女性はどのようにロココという豪華絢爛たる芸術スタイルを出現させ、誰の助力の下で、社会や経済にどのような影響を与えていたのか。本論文は17−18世紀のフランスの社会文化、等級制度と経済体系を分析し、ロココスタイルの出現、伝播と発展、および女性の生産と消費という順序で、ロココという女性優先主義に支配されたスタイルの背後にある諸要因について考察し、当時の女性の社会と経済における役割の分析を試みる。

目次

第１章　ロココ様式の出現の社会的背景 1

1.1 ロココ様式 1
1.1.1 バロックからロココへ 1
1.1.2 宮廷の女性たち 2
1.2 ロココ様式の出現の社会的背景 3
1.2.1 女性の地位 3
1.2.2 社会文化 4
1.2.3 階層社会 5
1.2.4 富の源泉 7

第２章　ロココ様式の出現と伝播 11

2.1 社交場 11
2.2 非合法恋愛 12
2.3 ファッションドール、流行雑誌とモード商 12

第３章　ロココ時代における女性の生産と消費 14

3.1 生産者としての女性たち 14
3.2 消費者としての女性たち 17
3.3 考察 18

第４章　結論 19

4.1 結論 19
4.2 限界と今後の研究課題 19

謝辞 20

参考文献 21

第1章　ロココ様式の出現の社会的背景

1.1 ロココ様式

1.1.1 バロックからロココへ

太陽王の輝きが暗くなるにつれ、毎日ベルサイユ宮殿でルイ14世をめぐる偽りに満ちた演劇を上演していることに気を取られた貴族たちは、隠しきれない喜びを抱いて、ルイ14世の逝去を迎えた後、自分の楽しみを探し始めた。ルイ14世時代、デカルト主義を基礎としたフランスのバロック様式は、完璧と理性を追求し、画一的、明晰、そして繊細で微妙なものへの病的な執着を通じて、極端な形式崇拝を示した。ルイ14世が去った後、摂政王時代から始まったロココスタイルは、貴族たちが彼らを縛ってきたルールと不自由に対する反逆のように、享楽主義を極致に発揮した。

バロック時代に理性を強調し身分や地位を誇示したのとは異なり、ロココ時代には、人々（特に貴族や新富裕層）は個人のぜいたく趣味を重視するようになった。この時期、彼らは依然として豪華さと贅沢さを重視していたものの、ロココスタイルは優雅で軽快で、より親しみやすく、そして遊戯心に満ちている。このような表面的で複雑な装飾性を重視した芸術スタイルは、ルイ14時代のルールから解放された人々の息詰まる前の時代への反抗と言える。

図１　アントワーヌ・ヴァトー(1717)『シテール島の巡礼』

出所：Antoine Watteau, *Pilgrimage to Cythera*, 1717, (Musée du Louvre, Paris). 2023年3月10日検索: https://smarthistory.org/antoine-watteau-pilgrimage-to-cythera/

1.1.2 宮廷の女性たち

ロココスタイルといえば、真っ先に思い浮かぶ宮廷女性はポンバドゥー夫人であろう。ルイ15世の宮廷で最も実力がある愛妾として、彼女は自分の美貌、知恵、上品な審美によって、当時のフランス全体に影響を与えた。貴族出身ではなく、平凡な市民の家に生まれたポンパドゥールは、「乗馬と舞踏、絵画と版画、歌と朗読を、最大級の見事さでやりこなし、目ぼしい新刊書のすべてを読んで批評した。戯曲、哲学、小説、国家論を繊細この上ない理解力をもって読みこなした」(Friedell,1928; 宮下訳, 1987, p131)。ルイ15世の支持の下で、ポンバドゥー夫人はロココ芸術の強力な保護者と伝播者となった。彼女は多くの芸術家を支援し、多くの王立建築を装飾し、改造した。彼女が出資したセーブル製陶所は当時のフランスの磁器業の発展を牽引し、生産されたロココスタイルの磁器（図２）はヨーロッパ全体から歓迎された。彼女が推賞した服とメイクは、ヨーロッパ各国の貴婦人たちが真似されて、これによってヨーロッパ全体のファッションをリードした。また、芸術への貢献のほか、彼女はヴォルテールやモンテスキューなどの啓蒙思想家を積極的に擁護し、ディドロの『百科全書』の出版を支援し、間接的にフランスの啓蒙思想の伝播と発展に貢献した。

図２　中国風のポプリ・ポット

出所：Pot-pourri "à vaisseau". 2023年3月10日検索: https://collections.louvre.fr/en/ark:/53355/cl010104624

ロココスタイルを頂点に押し上げたもう一人の人物は、ルイ16世の王妃マリー・アントワネットであった。このオーストリア出身の王女、ツヴァイクが描いた「ロココの王妃」は、贅沢の限りを尽くした生活で批判を浴びた。ルイ16世の支持の下で、衣装や髪型を好むマリー・アントワネットは、自分の専属デザイナーであるローズ・ベルタン（Rose Bertin、1744-1812）が設計した服を着用し、ヨーロッパ全体のファッションを牽引した。彼女は

服装に季節の概念を取り入れ、季節に合わせて服装のスタイルを変え[1]、流行の迅速化を促した。そして「モード大臣」としたのローズ・ベルタンの創作は、当時のフランスのファッション業界の中心としての地位を築き、近代の婦人服デザインにも大きな影響を与えた。

図３ エリザベート＝ルイーズ・ヴィジェ＝ルブラン（1783）マリー・アントワネット

出所:*Portrait of Marie Antoinette by Elizabeth Vigee Le Brun, 1778.* 2023 年 3 月 10 日検索: https://blog.fabrics-store.com/2020/09/01/marie-antoinette-rococo-queen/

1.2 ロココ様式の出現の社会的背景

1.2.1 女性の地位

18世紀のフランスでは、ロココという女性優位の芸術形式が発展し始めたものの、当時の女性の地位が高かったとは言えない。

例えば、玉田（2016）によると、ルソーが描く家父長制核家族は、女性が男性に経済的にも知的な面でも精神的にも完全に従属するべきとするものである。また、モンテスキューは『法の精神』という著作で、女性に王位継承権を認めないフランスのサリカ法を批判し、女性が国を統治することを認めているという全く新しい女性像を提示したものの、こ

[1] ルーヴル美術館公式サイト参照。2023 年 3 月 10 日検索:https://www.chateauversailles.fr/decouvrir/histoire/grands-personnages/marie-antoinette#marie-antoinette-dans-lintimite.

の著作で、君主制の国々では女性は慎みがなく、奢侈による虚栄を追求する女性は宮廷を支配すると、習俗に及ぼす悪影響に向けられて、「人民が有徳であることは極めて難しい」と述べた。

ル・ボゼック(2019)によると、当時、「大多数の場合、女性であることは、人生の間ずっと男性に服従し、何をするにも男性に弁明しなければならず、常にその監視下に置かれ続けることを意味した。女性は完全な権利を有する個人とはみなされず、男性に劣り、市民社会の外側に置かれ、私的空間に閉じ込められて、まったくの自立が認められなかった。家庭では、女性は家事にいそしむ人、それも、法的な根拠が男性によって保証されてのことであるが、母もしくは主婦として認められるだけの存在である」(Le Bozec, 2019; 藤原訳, 2022, p29)。

これらの例から見ると、当時の女性が夫に従属する妻として自立を奪われるべきという社会的イメージや、女性の法の権利に対する無視や、そして女性の奢侈への追求に対する社会からの批判などからは、女性の地位の低さが明らかになる。

1.2.2 社会文化

バロックからロココへと移り変わった社会文化の背景の一つは、人々が快楽と贅沢への追求である。そしてオルレアン公フィリップ 2 世が摂政時代に試みられた平和政策は、このような変化を出現させた原因の一つである。小井戸(1980)は摂政時代について、次のように述べていた。

オルレアン公の摂政時代は「18 世紀の幕開きである。この時期は陰にこもって息苦しかった前の時代への反動期で、そこには比較的自由な気分がみなぎっていたともいえる。だがこれは見方をかえれば、君主制の権威の危機のあらわれに他ならない。摂政は貴族と高等法院への懐柔、検閲と治安の緩和などの施策をこころみるが、王権の強化にはいっこう役立たない。やがてその政策も放棄され、もとのルイ 14 世式の体制がよみがえる。このようにしてヴェルサイユの威信がおとろえてゆくにつれ、一方では快楽と奢修と金への趣味が蔓延する。また他方、前世紀の末からくすぶっていた反絶対主義の批判精神が力をえてくる」(小井戸, p125)。

もう一つの重要な背景は、ヨーロッパでの両性関係の変化である。ミンネザック（愛の歌の意）を起点に、愛は神に守られ、認められ、祝福されるものから世俗化し、非合法的な恋愛が正当化されてきた。女性の美は画家や詩人の作品の中で快楽と結びつき、愛は美への憧れとなり、快楽を追求する一部となった。神によって浄められず、あるいは制度上（つまり結婚）結ばれていない性愛は、「罪」の刻印を押されたものから（Sombart,1922; 金森訳, 2000, p92)、受け入れられるようになった。愛を論じる理論家の目には、愛は本能的であり、制度に縛られないものである。そして結婚については、「人は愛のためだけに

よって結婚するのではない。愛以上とはいわないまでも、愛と同程度に、子孫や家族のために結婚するわけだ」、「よい結婚は愛の仲間たることをこばみ、友情の喜びをこそ求めるものなのである」とモンテーニュは考えている（Sombart,1922; 金森訳, 2000, pp105-106）。数百年にわたる愛に対する人々の思考の中で、結婚と恋愛がそれぞ分離し、それぞれ同等の権能をもって並び立つようになった。イタリアの影響を受けてから、十七および十八世紀のフランス人の愛の追求は頂点に達した。フリーデル（1928）によると、愛しつつ死に近づくは、ロココ全体を表わす公式である（Friedell,1928；宮下訳, 1987, p115）。

図４　ジャン・オノレ・フラゴナール（1767）『ぶらんこ』

出所：*Les hasards heureux de l'escarpolette (The Swing)*, Jean-Honoré Fragonard. 2023 年 3 月 10 日検索: https://www.wallacecollection.org/explore/collection/search-the-collection/les-hazards-heureux-de-lescarpolette-swing/

1.2.3 階層社会

摂政時代から、貴族や宮廷の人々は、「瀕死でも人生を楽しむという楽観主義」を抱いて、万事を遊びとして、その瞬間の楽しさを残して楽しみたいと思っていた。しかし一方、ルイ14世時代からフランスの階層社会は、暗に変化していた。

フランス絶対王政期から、ルイ14は王権強化のために、貴族たちをヴェルサイユ宮殿に

集中して、大貴族の権威を低下させ、新興貴族層やブルジョワ階層を登用した。その中で、「帯剣貴族」と別に、貴族の称号の付いた官僚の職を購入した新しい貴族である「法服貴族」が（平野, 2019, pp64-65）、裕福な平民が金を利用して社会的上昇を得る重要なルートとなった。官職売買制度以外、貴族免許状の発売に加え、貴族の名誉と市民の金が結婚を通じて融合するなど、結局フランスの貴族のほとんどが爵位を得た成金から構成されるようになった（Sombart,1922; 金森訳, 2000, p46）。ゾンバルトは、フランス革命末期の貴族のありさまに対する統計を用いて次のような証明を提供した。

「当時二万六六〇〇の貴族の家があげられたが、そのうち一三〇〇から一四〇〇が旧家の貴族（遠い昔の、あるいは高い家柄の貴族）に属するだけであり、残りの新貴族のうち四〇〇〇が官僚貴族であった。だが資本家がフランスの貴族の中に占める割合は、ふたたびここで、異常に多い貴族と成金の富裕なあととり娘との結婚を勘定に入れた場合は、前記の数字が示す以上にさらにふくれあがることになる」（Sombart,1922; 金森訳, 2000, p47）。

当時のフランスでは、貴族の政治的に極めて優越した立場および物質面での利益（Sombart,1922; 金森訳, 2000, pp42-43）により、富裕になった新興成金は貴族階級に入り、より高い社会的地位を得ることへの渇望が他の国の人々より強かった。上流階級に属さない人々は、自分たちの社会的地位を少しでも補正したい欲求を抱きながら、上流階級が所有するモノを模倣して、自分のステータス・シンボルを示す（De Vries, 2008; 吉田&東風谷訳, 2021, p57）。一方、ルイ14世の華麗さと豪華さへの愛により、彼の影響で、贅沢はその時代の風潮となった。このような社会において、人々の「誇示的消費[2]」が大いに刺激されて（De Vries, 2008; 吉田&東風谷訳, 2021, p61）、貴族階級に溶け込むために、彼らは身代を傾けて宮廷や貴族階級に模倣して自分を装って、自分と平民を区別しようと努力していた[3]。

「富者の目標は、結局のところ社会的に高級な階級、つまり貴族、ジェントリーの一員に加えられることだという考え方があったことである。そればかりではない。富だけでは貴族階級に属する資格はなく、まったく市民的でないものとされている特徴、すなわち業務に追われる生活から一定の距離をとることや家族の伝統の保持、とりわけジェントルマンにとって自明のならわしとされる紋章の使用が、貴族に仲間入りする資格とされた

[2] 『有閑階級の理論』の中でソースティン・ヴェブレンが提案した、有閑階級の人々が自分の社会的地位、富裕さ、品位、スタイルを示すために行われる消費行動のことを指す。

[3] 平民と区別しようと努力したことは、ロココ芸術が後期に極度の弱々しさや不自然さに発展した原因の一つと言えるであろう。フリーデルによると、「ロココにおいては、女性はどれほど女性らしくしかも子供っぽく見えてもまだ足りない、といった感じだった。触れれば壊れてしまいそうな感じが理想とされた。焼き物の人形のような感じが意識的に真似られた。健康は面白くなく、力強さは平民的でいやしいものとされた。コルネーユやコンデの時代にはまだ一種の善美思想にそっていた貴族的理想像が、「繊細さ」、過敏さ、気品のある弱々しさ、生活能力欠如をとりつくろい、今にも死にそうに見える様子をことさらに強調することを理想とするものに変わった」（Friedell,1928；宮下訳, 1987, p124）。

ことに、貴族階級の封建的性格が残っている」（Sombart,1922; 金森訳, 2000, pp38-39）。

このような変化の中で、貴族も影響を受けた。上流階級は社会層の秩序を強化し、自分を他の階級と区別するために、絶えず新しいものを追い求めなければならず（De Vries, 2008; 吉田&東風谷訳, 2021, p57）、それによって服飾やインテリアの所有期間が短くなった（De Vries, 2008; 吉田&東風谷訳, 2021, p168）。

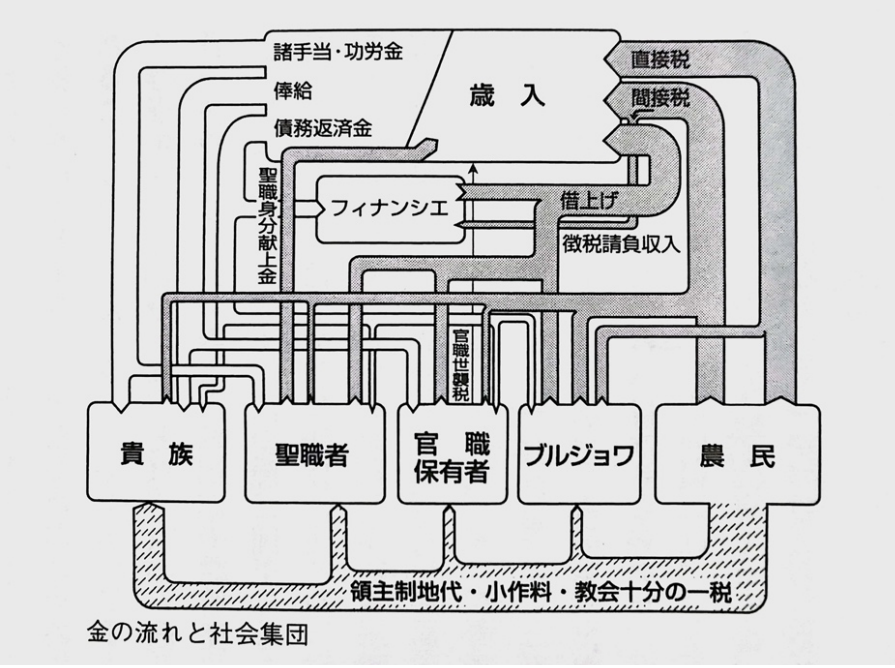
ゾンバルト（1922）によると、これらの家財を傾けて貴族を模倣しようとする新興成金と競争するために、一部の貴族は家族の財産を残り少なく浪費し、一部の貴族は金持ちの家族と結合することを選んだ。そしてこうした過程で、「貴族たちが新興成金の唯物的な考えに屈従した」（Sombart,1922; 金森訳, 2000, p178）。社会的流動化に伴い、このような模倣者と被模倣者との相互作用の中で、流行の加速化が促進され、上流階級の興味も急速に拡散した。

1.2.4 富の源泉

当時の上流階級の富の源は、主に税収と貿易である。

まずフランス国内を見ると、リシュリューがブルボン王家を助けて絶対王制を樹立し、フランスがヨーロッパ大陸での覇権を勝ち取るのを助けた時から、戦争の負担は平民の肩に落ち始めた。それ以来、農民から受け取った税金は、他の社会団体の収入の重要な「財源」であり続けてきた。福井（2021）は16世紀以降の金の流れと各社会集団との関係を図5のように整理した。

図５



出所：福井憲彦 編著（2021）『フランス史 上』山川出版社, p192

歳入は主に農民とブルジョワからの直接税、すべての社会集団からの間接税（塩税、関税、取引税など、大部は農民が負担する）とフィナンシエ（銀行家や徴税請負人など国王の金を扱う者全体をさす)からの巨額の借上げや公債の発行で構成されていた。その中で、すべての貴族、聖職者は直接税タイユを免除され、官職の高い官職保有者にも免税特権が持っていた。また、ブルジョワも直接税を支払っていない者が多い（福井, p193）ので、この税収システム全体から見ると、農民は税金の最も主要な負担者であった。

歳出を見ると、大部分を占めている軍事費以外のは、軍事費に由来して雪だるま式にふくれあがる債務返済金と宮廷費である。これらの費用は元本償還・利子支払い、貴族や官職保有者に与える俸給と功労のあった臣下や取巻きに与える諸手当（福井, p193）という形で、農民以外の諸集団を潤していた。

しかし、近世フランスでは、経済構造における農業の圧倒的な比重、生産技術の進歩がないこと、そして工業において小規模な手工業や繊維工業に偏っていることにより、このような経済構造は脆弱性を内包し、間欠的に経済危機を引き起こした(福井, pp215-216)。

また、税金といえば、ルイ14世の財務総監であり、貿易差額主義をもとに重商主義を実行してきたコルベールに言及しなければならない。国の富を増やすために、コルベールは関税をコントロールする（原料に対しては高い輸出関税を、完成品に対しては高い輸入関税を課す）ことで輸出を促進し、植民地を単なる消費者に格下げさせた（Friedell,1928；宮下訳, 1987, p79）。そして国内では、コルベールが輸出奨励金、専売権、課税免除、非課税国庫融資、建築用土地の無償供与、活動目ざましい企業家への爵位提供などの保護策を通じて工場制手工業の発展を支援していた。彼の努力のおかげでルイ14世時代のフランスは対外拡張に強力な経済基盤を築いたものの、その同時に、食糧やその他の農産物の輸出禁止や輸入奨励などの政策により、フランスの農業生産は衰退した。

貿易といえば、植民地と三角貿易に言及しなければならない。十七世紀後半から、コルベールは行政改革、経営主体の刷新、「排他制」と呼ばれる通商制度などを通じて、植民地の再編を試みた（平野, 2019, p53）。この時期、フランス領西インド、カリブ地域などを含む、フランスの大部の植民地が砂糖生産地帯に転換するとともに、砂糖の消費がヨーロッパで急速に拡大し始めた。砂糖生産は奴隷を数多く使うプランテーション方法を採用しているため、奴隷貿易が盛んになってきた（表１）。十八世紀に西アフリカ、カリブ海域と母港の間の三角貿易が順調に発展するにつれ、これらの奴隷貿易に参加した貿易都市は巨利をもたらした（福井, pp244-245）。

表１

		白人	有色自由人	黒人奴隷	合計
カリブ海地域	サン・ドマング	27,717	21,808	405,564	455,089
	グアドループ	13,466	3,044	85,461	101,971
	マルチニック	10,603	4,851	73,416	88,870
	サント・リュシー	2,159	1,588	17,221	20,968
	トバゴ	425	231	13,295	13,951
南米	ギアナ	1,307	494	10,748	12,549
インド洋諸島	ブルボン島	8,182	1,029	47,195	56,406
	フランス島	4,457	2,456	37,915	44,828
インド	インド	4,000			4,000
北米	サン・ピエール・エ・ミクロン	1,500			1,500
その他も含めた合計		73,816	35,501	690,815	800,125

フランス領の主要植民地の人口構成（1788年）

出所：福井憲彦 編著（2021）『フランス史 上』山川出版社, p245

リシュリューとコルベールの努力はあったものの、ルイ 14 世がヨーロッパで覇権を争うために戦争に参加し続けたため、国庫の赤字は膨らむばかりであった。摂政時代には、もう一人の重要な人物は、中央銀行の設立、銀行券の発行、植民地貿易の拡大などの政策を通じてフランス経済に一時的な活力をもたらした。

王政の財政破綻を解決するために、摂政の信任を受けたスコットランド出身のジョン・ローは、経済を活性化させるため、金貨や銀貨といった正貨ではなく、実体経済によって担保された紙幣を発行し、貨幣の供給を拡大する必要があると主張した（北村, 2012, p3）。古川（2015）によると、その中に内包している「財に対する需要と供給がその価格を決定するというミクロ経済学の最も基本的な命題」、「貨幣とは貨幣の素材や形態とは無関係に、貨幣としての機能を果たすものが貨幣であるという貨幣機能説」、貨幣数量説に立脚する物価決定の理論などは、後世の経済理論の発展に大きく貢献した。

なお、ローは、銀行貸出の重要性を重視して、1718年にはバンク・ジェネラル（ルイ14世崩御の翌年にローの提案によって設立された発券銀行）が国営のバンク・ロワイヤル（Bank Royale）に改組された。また、ローは1717年に、「西方会社」を設立し、1719年に東インド会社や中国会社など諸会社を統合継承して、「インド会社」（巷間でミシシッピ会社と呼ばれる）に改組されて（古川, p253）、信用システムの発展に促進した。この間、現金決済を超えた信用貸しという制度がさらに発展して、年間の決済時期と物質文化（新たな商品をいち早く入手することと節制せずに浪費に走っていた現象）の変化をもたらした（De Vries, 2008; 吉田&東風谷訳, 2021, pp196-199）。大野・中村・宮下・望月（2016）は、ジョン・ローに対して次のように評価した。

「彼は職を解かれたが、経済の再生という面でその功は小さくない。十七世紀末に始ま

る経済的な発展に弾みをつけ、1730年代の工業・農業生産の上昇、さらに貿易の拡大などを導き出した。贅を尽くした華麗なロココ美術、とりわけ調度や家具などはこうした背景なしには考えられない」（大野, 中村, 宮下, 望月, p528）。

第2章　ロココ様式の出現と伝播

2.1 社交場

ロココ時代は、バロック時代に対する一種の反逆として、上流階級は反理性的かつ反絶対主義的な形で享楽主義を推賞し始めた。また、社会的流動化が進むにつれ、富者は上流階級を模倣し、華やかな服装で自分を彩り、宮廷の趣味に由来するロココスタイルの伝播に沃土を提供した。その中で、ロココの形成条件の一つとして、そしてロココ芸術とともに成長していくのは、反絶対主義的な精神である。その精神は、サロンを通じてロココ芸術とともに伝播し、フランス啓蒙主義の発展の礎となった。

サロンはロココ芸術が伝播する最も重要な舞台と言える。17世紀の初め、ランブイエ侯爵夫人カトリーヌ・ド・ヴィヴォンヌはフランスでサロンを始めて以来､その後二百年間、女主人を中心にしたサロンは「フランスの精神生活を特色づけるものとなった」（Friedell,1928；宮下訳, 1987, p63）。17世紀のスキューデリ嬢、サブレ夫人など、18世紀のデファン夫人、ジョフラン夫人、タンサン夫人、ネッケル夫人、スタール夫人、レスピナス嬢（Le Bozec,2019; 藤原訳, 2022, p14）など、これらの才能溢れる女主人の支配下にあるサロンは、才能ある人々が宗教、文学、芸術、哲学、自然科学、政治などの各分野に関する思想や見解を交流する重要な場所となっていた。ルイ14世時代の後期、爵位や高い官職が買えない新興ブルジョワ階級は、宮廷に出入りできないものの、新興のサロンに出入りするのが好きであった。ルイ15世時代、パリの貴婦人が開催したサロンは当時の世俗的な生活の核心と文化の気風になった。これらの貴婦人たちは多くの上流階級の人々（貴族、上層ブルジョワジー、文学者、芸術家など）が集まって、当時は社会文化の中で貴婦人の審美を主導するファッションが形成した（張, 2006, p34)。

また、サロンは私的な空間として、「軽い」、「柔らかい」、「自由」なイメージを求めるため、サロンに集まる人々は、アジアの軽いシルクや木綿などに、衣装の素材を求めていくようになった（伊豆原, 2012, p5)。それらの軽やかで柔らかい印象の生地で製作されの衣裳は、後に、宮廷衣裳のデザインや生地、その美意識にまで影響を及ぼしていった（伊豆原, 2012, p11)。

ロココのもう一つの舞台は劇場である。フリーデル(1928)によると、「その（ロココの）核心とは、演劇の世界だった。気の利いた変装、甘美な錯覚、さまざまに色を変えながら輝く喜劇に対してロココ時代ほど情熱が注がれたのは、後にも先にもないことだった」（Friedell,1928；宮下訳, 1987, p127）。イタリアから始まったオペラ劇場はフランスに伝来すると、最初の宮廷だけに奉仕していた宮廷劇場から、入場料を支払えば誰でも観られる劇場へと発展して（その中でルイ14世の支持が大きな役割を果たした）、上流社会の人々の集まる場所（Sombart,1922; 金森訳, 2000, p222）として華美な衣装が展示される場所に

なった。

2.2 非合法恋愛

様々なサロンを開催し、出入りする貴婦人や、劇場で華美な衣装を展示する俳優たちのほか、ロココ芸術の伝播と発展に重要な役割を果たしたのは、娼婦であった。

ゾンバルト(1922)によると、両性の関係の変化とともに、自由な恋愛への追求は、誘拐と姦通という2つの形で実現することが多い（Sombart,1922; 金森訳, 2000, p108）。中世以降、売春婦が増加するにつれ、古代ローマ時代のように、最高の恋愛の技巧を磨き続ける、美しく才能豊かな女性たちがもう一度現れた。フランソワ一世時代から、社会の上層部において、高級娼婦[4]という新しい層の婦人が出現した。そして16世紀の末期、17世紀の初期から、パリの劇場に女性が出演するようになったことに伴い、「劇場の女優、スター、グランド・オペラの踊り子たちは、十五世紀に詩作にふけったり、画筆をとったりしていた娼婦たちと交替するにいたった」（Sombart,1922; 金森訳, 2000, p119）。

これらの優雅な娼婦たちの活躍に伴い、上流階級の婦人たちの趣味の形成も影響を受けていた。彼女たちと競争するために、上流階級の婦人たちが負けないように変化を始めた。さらにこのような競争とともに、「娼婦たちの生活方式が、外面的には社交界（当時は上流社会のすべての婦人）の生活のあり方の模範になった」（Sombart,1922; 金森訳, 2000, p122）。

2.3 ファッションドール、流行雑誌とモード商

当時の宮廷女性の服装は、法国だけでなく、海外の流行を牽引した。その中で、ファッションドール、流行雑誌とモード商の対外紹介は、服飾流行の伝播の中で大きな役割を果たした。

十七世紀以来、「パンドラ」と呼ばれるファッションドールは、フランス宮廷文化（特に服飾流行）を海外に伝える役割を担ってきた。伊豆原(2012)はファッションドールについて、次のように紹介した。

「フランス宮廷の様子は、実物大もしくは、およそ人体の 2 分の 1 サイズで作られた「パンドラ」と呼称されたファッションドールに、フランス宮廷女性の衣裳を着装させて、欧州各国に送られた。このファッションドールは、フランス宮廷モードの流行を欧州各国、後には、アメリカ大陸にまで運ばれた（伊豆原, p4)。

ファッションドール以外、ルイ 16 時代からさらに安く、そして服飾流行を視覚的に示すだけでなく、文字を通じて新しい情報を提供できる流行雑誌は、服飾流行の伝播にも貢

[4] ゾンバルトによると、高級娼婦という言葉は、最初は宮廷内部での媚を売る女だけを指していたものの、次第に宮廷とは関係のない高級な娼婦に変化した（Sombart,1922; 金森訳, 2000,p112）。

献していた（角田, 2013, p35）。

また、18 世紀半ばからは、新しい職種としてのモード商が、ロココの伝播に重要な役割を果たし始めている。第 1 章で触れたマリー・アントワネット王妃のファッションデザイナー、ローズ・ベルタンは、当時のモード商の一人であった（角田, 2013, p30）。

角田(2013)によると、装飾品の販売と製作、着装法を考案するなどの仕事（角田, 2013, p41）をしているモード商は、「顧客からの注文通りに商品を作り売る名もなき手工業者/小売商ではなく、自らの才能によって顧客を集め、顧客に対して流行を示す存在」（角田, 2013, p45）である。また、伊豆原(2012)によると、モード商は生地見本にレース、リボンなどの小物と共に、フランス宮廷の王妃、寵妃たちの衣裳と暮らしを紹介する一方、新しい生地を用いて衣裳をデザインし、レースやリボン、コサージュ、オヤ(フライ・フリンンジ)などの装飾品から、帽子、靴、ネックレスなどのアクセサリーに至るまでトータルに取り扱った。「モード商人の役割は、デザイナーであり、スタイリストであったといえよう」（伊豆原, p4）。

これらのモード商は、当初同業組合（ギルド）を持たなかったものの、後に認可され、服飾品の生産・流通過程の中で特異な位置を占めることになり（角田, 2009, p82）、流行の伝播と小売業の発展[5]に極めて重要な役割を果たしてきた。

[5] 角田によると、モード商は、中間財加工・小売と最終消費財製造・小売双方に携わるため、中間財小売と最終消費財小売を分断する従来の分業体制を超えた革新的な性格を持っていた（角田, 2009, p86）。

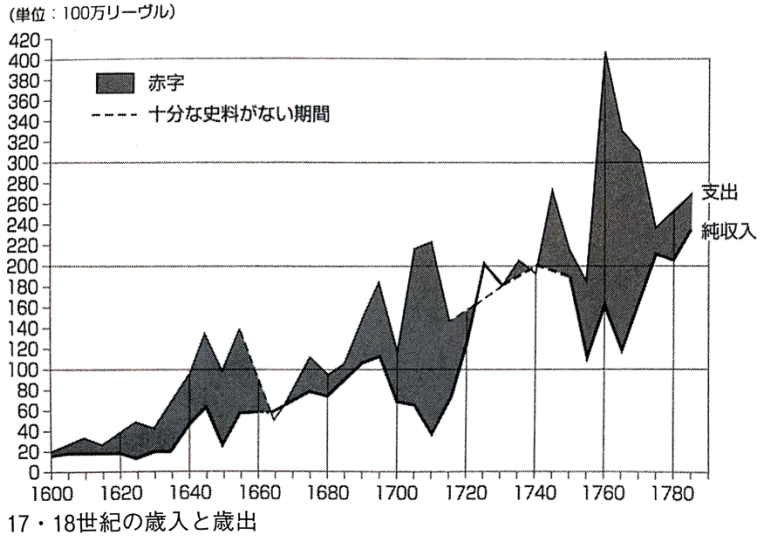
第3章　ロココ時代における女性の生産と消費

前述したように、ロココスタイルの出現にも伝播にも、女性は大きな役割を果たしていた。しかし当時、三つの身分がはっきりしていたフランスでは、異なる階級の間に想像できないほどの巨大な貧富の差があった。ロココという上流階級に由来して流行していたスタイルは、第三身分の人々、特に第三身分の女性たちとどのような関係があるのだろうか。

3.1 生産者としての女性たち

福井(2021)によると、フランスは十七世紀の「全般的危機」を乗り越えた後、1730年から、対外貿易の繁栄、一部の富農の新しい効率的な農業方式の導入による農業生産の増大、そして工業の部門におけるプロト工業化[6]（農村工業）の発展により、経済が好転し始めた（福井, pp249-250）。

図６



出所：福井憲彦 編著（2021）『フランス史 上』山川出版社, p194

仲松(2021)は「18 世紀フランスの経済発展の再検討 ： 農村工業化研究とジェンダーの視点から」という論文で、経済史家ギヨーム・ドダンの『商業と経済的繁栄―18 世紀フランス』での研究を紹介された。ドダンが独自に行った試算によると、18 世紀フランスにおいて、商業活動などのサービス業を除く純生産(PPB: Produit physique brut)は、名目成長率が年 1.25%であり、これを国民一人当たりの実質成長率に換算すると、年 0.6%の

[6] 産業革命以前にヨーロッパの多くの地域で出現した農村部における手工業生産の拡大という社会現象を指す。この現象は 20 世紀後半にアメリカの経済史家フランクリン・F. メンデルスによって「プロト工業化」と定義された。

成長がみられた。そしてサービス業を除く純生産の部門別の割合は、18 世紀初めには工業部門が 27%を占めていたものの、18 世紀末には 35%から 45%へとその割合を増加させるにいたった。ドダンは生産における農業部門の占めた割合は依然として高いものの、工業部門の成長こそが、18 世紀フランスの経済成長の要を握っていたと主張していた（仲松, p50)。

ド・フリース(2008)によると、プロト工業化という現象は、北西ヨーロッパの経済発展だけでなく、女性史にも多大な意義を持っていた。「プロト工業化を無視するわけにいかないのは、これが女性と児童の労働を市場向けに方向転換させ、農業の季節的制約に由来する無為と働き口不足にさらされていた労働力に、積極的な市場の活用を促したからである」（De Vries, 2008; 吉田&東風谷訳, 2021, p113）。仲松(2021)によると、ゲー・L・ガリクソンによれば、プロト工業化の現場に、女性労働者は多く存在していた。ガリクソンは、ノルマンディー地方の綿織物産業において、労働に従事していた者は圧倒的に女性が多かったと指摘し、ノルマンディー地方の主都ルアン近郊のコー地方で繊維産業に従事していた労働者のうち、約88パーセントは女性労働者であったと提示した（仲松, p55)。

しかし仲松(2021)によると、ド・フリースは『勤勉革命』に対応の証拠を提出しなかったため、この論点は疑われていた（仲松, p60)。一方、ガリクソンの指摘とは矛盾をきたす論述が、ドダンの著作には散見される。ドダンは農村の家内工業に従事していたのは男性であることが多く、重要な働き手であった妻を働き手に入れておらないと考える。また、ドダンは農業を行うか工業を行うかを選択する場合にも、男性労働者のみが選択主体であったと指摘した（仲松, p56)。一方、仲松(2021)によると、ドダンは、プロト工業化と経済の関係を分析する際に、プロト工業化を貧困化の問題と関係づけて議論することを避けていた。また、仲松は、当時の女性労働者の賃金は男性に比べて低く抑えられていたため、プロト工業化と経済発展の関係性を論じる場合には、前提として十分にふまえなくてはならないと指摘した（仲松, p58)。

プロト工業化、特にプロト工業化の現場にいる女性労働者たちが十八世紀のフランス経済によい影響を与えたかどうかについて、経済史家たちが一致した結論を出しにくい最も大きな原因は、実証に十分な史料がなかったことにある。史料が見つからなかった理由は、当時の女性は外で働くことが認められておらず、公民身分登録簿や洗礼簿には女性の職業についてはほとんど言及されておらず、埋葬記録にも、亡くなった女性の職業状況に関する情報はほとんど含まれていなかったからである（Martinat, 2011)。十八世紀には、女性は家にいることを強く励まされ（搾取は外と同じくらい大きいものの、少なくとも道徳的には合理的である)、外で働くことは売春と同一視されていた[7]。女性が仕事に行けば、

[7] Une histoire du droit au travail des femmes.2023 年 3 月 10 日検索: https://pratiques.fr/Une-histoire-du-droit-au-travail.

夫が彼女を養う能力がないと認めるため、これは恥ずべきことだとみなされた。一部の医師は、女性の労働が妊娠や子供の母乳育児に有害だと考えていた。さらに、ミシンの震えは女性の出産能力を損なうと考える人もいった（Wailly, 2004）。「人々は、都市生産は男の特権だと信じていて、古い制度の中のフランス人女性を転売、服装、売春業界に制限し、彼女たちの生涯と数世紀以来、主に主婦、メイド、出産者の機能に割り当てられてきた」(Sabine & Nicole, 1994, p478)。

史料の欠落により、女性の労働がフランス経済に与える影響は結論が出にくい。しかし一方で、このような環境の中でも、多く女性は農村や都市部で勤勉に労働を行っていたことは、間違いないと言える。

まず服飾製造業を見ると、女性はフランスの織物産業で労働を行い、すでに長い歴史を持っていた。ゾンバルト(1922)によると、十四世紀初頭には、生糸を紡いだり、撚ったりする「紡ぎ女」と呼ばれた女工たちは、すでに呉服屋で賃金労働者（パンを交換するのため）として働いていた（Sombart,1922; 金森訳, 2000, p304）。一六六九年、フランスでは一万七三〇〇人の労働者および女工がレース工業で働いていた（Sombart,1922; 金森訳, 2000, p309）。この時期には、女工たちが寝泊りしたり、食事したり、さらに教育を受ける本格的寄宿学校が出現した（Sombart,1922; 金森訳, 2000, p311）。

角田(2009)によると、従来仕立は男性仕立工の専業であったものの、実際には非合法に女性服仕立を行う女性がすでに存在した。1675 年、ルイ 14 世は女性の女性服仕立工の同業組合を認めたものの、胴部の加工は腕力が必要だとして男性服仕立工の職分とされた。その後、女性服仕立工は女性服すべての仕立を担えるよう約 1 世紀間要求を続け、1781 年ついに認められた（角田, 2009, pp83-84）。

また、角田は、手工業レースの製造者は 3 世紀を通して女性であり、かつ貧しい層が多く、文字史料が残りにくいし、家内製造だとやはり史料が残りにくい（角田, 2020, p163）と指摘された。当時、非常に複雑な技法を用いて製造しても、貧困層かつ女性の労働者としては、相応の報酬を得ることは難しい。レース製造業の労働者が得る報酬について、角田は次のように述べていた。

「前近代において、商品の価格は製造費とは必ずしも相関しない。まだ小売業に定価が存在せず、小売商は顧客とのやりとりの中で価格を釣り上げて利益を載せていく習慣だったため、小売価格に製造費、特に人件費が占める割合は相対的に小さい。奢侈品であればあるほど、その傾向は顕著である。よって、ニードル・レースが膨大な労働力を必要とするとしても、それにより高価格になっているとは言いにくい。そもそも手工業レース工は、女性、かつ貧しい層が多いと思われるため安い労働力である。つまり、費用と収益・利益の関係を巡る現在の考え方では必ずしもレースの商品としての価値を理解できない」（角田, 2020, p169）。

泉山(1987)によると、「刺繍に関しては男女の労働力を使われ、1778 年のリヨンでは６千人の女性刺繍師を有し当時としては女性が最も多くの収入を得る仕事だったとの記録も残されている」（泉山, p37)。

ル・ボゼックは『女性たちのフランス革命』で、女性労働について次のように述べた。

「実際には、何千人もの女性たちが百いくらの熟練労働に従事していたが、指導する立場に就いた者はほとんどいなかった。職人に仕える労働者、店員、非常にまれだがアトリエの女主人もいた。それらの緻密な仕事は、手先の器用さと正確さを求めていた。たとえば、紡糸工、絹織工、レース編み女工、刺繍職人、ズボン製造職人、毛皮服仕立人、毛皮の加工のための皮革業労働者である。モード産業もまた、細心綿密に注意を払われた仕事を要求していた。たとえば、手袋製造業、メリヤス製造業、羽根や真珠の取り付け、扇子の彩色、金銀細工業、装身具製造業、帽子製造業、製靴業、長靴職人、飾り紐製造業である。（また、）高級家具、陶磁器の彩色の分野でも、女性労働力の需要は高かった」（Le Bozec,2019; 藤原訳, 2022, p38)。

これらの例からは、女性の働いた姿が明らかに見られる。当時の女性の給料は一般に男性の半分以下であったものの（Le Bozec,2019; 藤原訳, 2022, p38)、これらの産業の発展における女性の貢献を無視することはできない。また、ここで面白いのは、これらの女性たちが従事していた労働を見ると、多くはロココに関連の産業であろう。しかし、第三身分の女性たちの労働とロココの発展との間にどの程度の関係があるのかを議論するには、具体的なデータを用いて分析しなければならない。

3.2 消費者としての女性たち

この贅沢極まりない時代には、上流階級の女性の消費については、宮廷の中で王の愛人の費用を勝手に見ても驚くばかりである。例えば、ポンパドゥール夫人は19年間に、彼女自身の消費のために3632万7268リーヴルをつかった。デュ・バリー伯爵夫人は、はじめて権力の座についた時以来、1248万1803リーヴル11ドルニエをつかった（Sombart,1922; 金森訳, 2000, pp159-160）。そのほか、貴婦人たち、新興成金の娘たち、男の金を使って自分を装っていた娼婦たちも、積極的な消費者であった。

しかしそれ以外にも、第三身分の女性たちの消費に変化はないだろうか。

ド・フリース(2008)によると、ミシュリーヌ・ボーランの北フランス地方における一二〇〇品目におよぶ調査研究で、庶民の「所有物の増殖」が確認されていた。遺産目録の記録によると、品目数は社会層ごとにばらつきが見られるものの、十七世紀から十八世紀にかけて四七～八二パーセントも増加していた(De Vries, 2008; 吉田&東風谷訳, 2021, p142)。また、ダニエル・ロシュの1700年から1789年までにパリに住んでいた人々の遺産品目への調査によると、ワードローブの位置づけが、相対的にも絶対的にも重要性を増していった

（De Vries, 2008; 吉田&東風谷訳, 2021, p158）。

「すなわち、遺産品目の価格が五〇〇リーブルに満たない貧困世帯においても、遺品全体に占める衣服の価値は7. 5%から16%に増加している。衣服の相対的価値が倍増したことになり、この時代の女性が、たとえ貧しい世帯であろうと、どれほどアパレルを所有することに執着するようになったかを示している」。「その傾向は、貧困層より富裕層で、男性よりも女性でより強い」（De Vries, 2008; 吉田&東風谷訳, 2021, p158）。

これらの論述から、当時の平民は、貧しい世帯であっても、モノ（特に衣服）の消費が明らかに増加していたことがわかる。

3.3 考察

ロココ時代には、三つの身分がはっきりしていたフランスでは、地位が極めて低い第三身分の女性たちが、いつも暗がりで、見えない存在であった。しかし、外で働くことは認められておらず、男性と同等の教育や職業訓練を受ける機会もないものの、彼女たちは自力で技術を習得し、経験を積むことで職人としての技能を身につけ、多くの産業で勤勉に働いて、これらの産業の発展に大きな貢献をした。

一方、当時はどの階級の女性も、積極的な消費者として消費を行っていた。需要があるからこそ市場があり、労働力の提供があってこそ取引できる製品があるため、生産者かつ消費者としての女性たちは、当時の経済発展の中で無視できない役割を果たしていた。

ただ、第三身分の女性たちがロココスタイルと関係があるかどうかを分析するには、これから二つの問題を明らかにしなければならない。一つは彼女たちが製造した製品がどれだけ上流階級の消費に変わったか、もう一つは彼女たちが消費した商品がどれだけロココスタイルと関係があるかという問題である。これらの問題に対して、当時の女性の商業への進出（例えばモード商）は、切り口になるかもしれない。

第4章　結論

4.1 結論

本論文はロココ時代における女性に着目して、様々な視点から、18 世紀のフランスに女性の審美を主導とするスタイルが現れた原因と、女性がロココスタイルの伝播に発揮した役割を分析して、当時のフランスの社会文化と経済における女性の役割を分析してみた。

今まで、ロココ時代の女性に対するイメージは、優雅で美しい以外に、無知、浅薄、見栄っ張り、物質的なものが多かった。しかし実際には、このような男性主導で、女性の地位が極めて低い社会では、女性は美しい飾り物として存在していたにすぎない。このようなイメージの背後には、当時の女性の社会的弱者の地位が隠されていた。

また、よく見過ごされていたのは、当時はサロンを開催して各分野の思想交流を促進し、啓蒙思想の伝播を助けた才気あふれる貴婦人たちも、さまざまなスキルを学び、恋愛の技巧を磨いて男性の好みに合わせていた娼婦たちも、税金の重荷の下で勤勉に働き、多くの産業の発展に貢献した女性たちも、この不公平な時代の中で努力して前に進んでいた。

ド・フリース(2008)によると、モンテスキューによれば、女性は、歴史ある貴族と新たに生まれた新興商人階級の間の橋渡しをする重要な役割を果たしていた。そして「女性は、上流階級と中流・下流階級の仲裁人であり、文明化を推し進める役割を果たしてきた」(De Vries, 2008;　吉田&東風谷訳, 2021, p60)。当時の生産者かつ消費者としての女性たちの社会文化や経済への貢献は、見落とされるべきではなかった。

4.2 限界と今後の研究課題

本研究には次の 2 つの限界がある。

第一に、本研究の一部の論述は、二次史料を根拠としていた。結論を出す時に各学者の論述を比較するように努力したものの、今後は一次史料にあわせて考察と推敲を行う必要がある。

第二に、史料と言語の制約により、本研究における女性の労働と消費に関する結論は、データで証明されていなかった。これから具体的なデータや一次史料を集めることができれば、より一層の分析と考察を行いたいと考える。

謝辞

本論文は、一橋大学法学研究科副専攻「EU研究共同プログラム」での研究成果をまとめたものです。この２年間、問題設定から論文執筆に至るまで、中西優美子先生、秋山晋吾先生、熊本方雄先生、大月康弘先生とベルタラニチュ・ボシティアン先生から貴重な助言や指導を数多くいただきました。ここで先生たちに深く感謝いたします。

また、今回の研究に対して、西洋経済史という授業で森宜人先生と『勤勉革命』の訳者の一人としての東風谷太一先生から助言をいただきました。ここで先生たちに感謝の意を表します。

最後になりましたが、日本での留学生活を絶え間なく支えてくれた両親に、心より感謝します。

参考文献

De Vries, J.(2008). *The industrious revolution: Consumer behavior and the household economy, 1650 to the present.* Cambridge University Press. 邦訳, ヤン・ド・フリース(2021)『勤勉革命：資本主義を生んだ 17 世紀の消費行動』吉田敦, 東風谷太一 訳. 筑摩書房.

Friedell,E.(1928). *Kulturgeschichte der Neuzeit: Die Krisis der Europäischen Seele von der Schwarzen Pest bis zum Ersten Weltkrieg.* Verlag C.H.Beck. 邦訳, E. フリーデル(1987)『近代文化史２：ヨーロッパ精神の危機/黒死病から第一次世界大戦まで　バロックとロココ/啓蒙と革命』宮下啓三 訳. みすず書房.

Gullickson, G. L.(1986). *Spinners and Weavers of Auffay: Rural Industry and the Sexual Division of Labor in a French Village,1750-1850*,Cambridge.

Le Bozec, C. (2019). *Les Femmes et la Révolution,1770-1830*. Passés Composés/Humensis. 邦訳, クリスティーヌ・ル・ボゼック (2022)『女性たちのフランス革命』藤原翔太 訳. 慶應義塾大学出版会.

Martinat, M. (2011) « Travail et apprentissage des femmes à Lyon au XVIII[e] siècle », *Mélanges de l'École française de Rome - Italie et Méditerranée modernes et contemporaines*, 123-1, 11-24. https://journals.openedition.org/mefrim/589#quotation

McPhee, P. (2016). *Liberty or Death: The French Revolution*. Yale University Press. 邦訳, ピーター・マクフィー(2022)『フランス革命史 自由か死か』永見瑞木, 安藤裕介 訳. 白水社.

Sabine, J.& Nicole, P.(1994). Femmes, villes et travail en France dans la deuxième moitié du XVIIIe siècle. In: *Histoire, économie et société*, 13[e] année, n°3. Lectures de la ville (XVe-XXe siècle) sous la direction de Jacques Bottin et Alain Cabantous. pp. 477-500.

Sombart, W.(1922). *Liebe, Luxus und Kapitalismus*. Wagenbach. 邦訳, ヴェルナー・ゾンバルト (2000)『恋愛と贅沢と資本主義』金森誠也 訳. 講談社.

Wailly, J. (2004). Les différentes phases du travail des femmes dans l'industrie. *Innovations*, no 20, 131-146. https://www.cairn.info/revue-innovations-2004-2-page-131.htm

張琛(2006)「浅议洛可可艺术风格」『山西建筑』*32*(2), 33-34.

福井憲彦 編著 (2021)『フランス史 上』山川出版社.

古川顕(2015)「ジョン・ローの貨幣理論」『甲南経済学論集』*55*(3・4), 211-271.

平野千果子 編著 (2019)『新しく学ぶフランス史』ミネルヴァ書房.

廣田愛理(2019)「フランスの女性労働に関する社会経済史的考察：19 世紀後半から 1914 年まで」『フランス文化研究』*50*, 33-46.

伊豆原月絵(2012)「18 世紀フランス宮廷衣裳の織物の復元に関する研究：シネの技術」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』*2*, 3-14.

北村行伸(2012)「やさしい経済学・危機・先人に学ぶ：ジョン・ロー」一橋大学経済研究所.https://www.ier.hit-u.ac.jp/~kitamura/PDF/A239.pdf.

小井戸光彦（1980)「18 世紀フランスの文芸サロン」『茨城大学教養部紀要』*12*,125-144.

仲松優子(2021)「18 世紀フランスの経済発展の再検討: 農村工業化研究とジェンダーの視点から」『北海学園大学人文論集』*70*,47-63.

大野芳材,中村俊春,宮下規久郎,望月典子(2016)『西洋芸術の歴史 6』中央公論新社

泉山幸代(1987)「服飾刺繍に関する一考察: 18 世紀の宮廷服から」『北海道女子短期大学研究紀要= Bulletin of Hokkaido Women's Junior College』*22*, 35-46.

玉田敦子(2016)「フランス啓蒙と女性の地位（特集 ジェンダーと言語文化: 恐怖・嫌悪・欲望とジェンダー」『奈良女子大学文学部研究教育年報』*13*,11-18.

橘木俊詔（2021)『フランス経済学史教養講義 ―資本主義と社会主義の葛藤』明石書店.

角田奈歩(2004)「18 世紀パリにおけるモード商人像の成立」『人間文化論叢』*7*,81-89.

角田奈歩（2013)『パリの服飾品小売とモード商 1760-1830』悠書館.

角田奈歩(2020)「実物資料と現存技術に基づく 17～19 世紀西ヨーロッパのレース製造業史研究の試み」『経営論集= Journal of business administration』*95*, 161-175.